

「農村から日本と世界を元気に！」



NPO法人 自然塾 寺子屋 しぜんじゅく たらこや

甘楽の里に、農業を通じて地域活性化から国際協力まで幅広く活動しているNPO（特定非営利活動）法人「自然塾寺子屋」があります。「地球上で急速に減りつつある大切な資源を次世代に引き継ぐために、共生・共存の思想で育てていく。それが我々の“ミッション”」。理事長を務める矢島亮一さんに国際協力にける熱い思いを語っていただきました。

◇伝えるものは発展・改善の「プロセス」

子どものころ、自分の家が農家だということが何となく恥ずかしかった…。しかし、歳を重ねてその思いは180度転換し、今は「農家こそ誇りを持って良い」と確信している。

国際協力活動を始めて11年。この間にかけがえのないたくさんの方のことを学んだ。中でも最も大切な気づきは、日本に目を向けるということであった。国際協力という活動は、ついつい国外に目が向きがちである。でも一体、我々は何を拠り所として国際協力をしようとしているのだろうか？日本は援助国の中でも唯一、発展途上国であった経験を有している。その経験や心理的近さを拠り所としてこそ、途上国の人々にとって有用な協力ができるのではなからうか。農業関係の研修をしていると、今まで気づかなかった先人の苦勞・知恵・工夫の積み重ねに目を見張る。日本は1960年代からの高度成長によって一挙に豊かになったという見方は事象の上では正しいかもしれないが、人的資源の開発と

いう面から見ると明らかに観察力を欠いている。日本がその後のオイルショックから始まる停滞期においてできえ、技術上の発展に陰りを見せず、寧ろ世界に冠たる高品質・低コスト技術を獲得できたのは、それまでに培われた観察・問題発見・工夫というサイクルとそれらを生かすべき環境を整えたからではなからうか。

私が青年海外協力隊員として活動していた頃に、パナマの村人からよく言われた言葉は、「日本は金持ちだから」というものである。日本は金持ちだから何なのか？そこははっきりと言わない。だがその言葉の裏には、「金持ちの日本人に俺達の気持ちなんか分かるかよ！金があればできるし、金がないならできない」。あるいは「金持ちなんだから俺達を助けるのはあたり前だろ」ということであろう。その都度私は息巻いてこう言い返したものである。「我々日本人には苦勞と努力があったんだ。結果ばかり見ずにプロセスを見ろ！」と。だが、そのプロセスを語るには自分はあまりにも勉強不足だった。

そんな思いから、隊員や途上国の研修員に発展のプロセスを学べる機会を提供しようと思った。

研修生にとって新しい技術や知識は確かに有用であるが、その技術や知識が古くなる頃に果たして彼らは自分で更に新しいものを開発・発見できるだけの気概があるだろうか。

平成15年から甘楽富岡地域で研修を行っているが、地元の方々が途上国の研修員に野菜の作り方、そしてマーケティングのコツを気軽に教えているのを端から見ている、当初は気が気ではなかった。「そんなに教えてどんどん日本に輸出されたら大変では？」でも私の心配をよそに、地元の人々の顔には「そうなったらそんなでまた新しいものを考えればよい」という自信が漲っていた。彼らは、様々な試行錯誤プロセスを経てきたからこそ「自ら改善していく力」を体得しているのだろう。

◇青年海外協力隊派遣前研修

日本の戦後復興期における生活改善への取り組みは、私が青年海外協力隊員として活動していたパナマで強く感じたように非常に参考になった。現在の隊員が派遣されている国々の農村復興にも活かすことができる豊富な経験である。最近の特に若い隊員の多くにとっては、欧米主導の開発理念や実践事例、手法などを学ぶことはあっても、日本の戦後復興期、祖父母の代における農村社会開発理念、実践事例、独自に用いられた手法等について学ぶ機会ほとんどない。このような認識を踏まえて、これから途上国の開発現場に立つ隊員に、「先進国の一員」としての日本の状況だけでなく、そこに至ったプロセスも外国人に対して説明できるような知識を身につけてもらい、同時に、任地において日本の経験・実践例・手法を参考にしながら、それぞれの専門性に基づく活動計画を立案できるような実践的な研修を計画し、実施している。

◇帰国して、甘楽で農業を

現在300人近くの卒業生が無事帰国したが、多くの帰国隊員から、帰国報告とともに、「帰国後の進路は日本社会に目を向けたい」と相談を

受けることも多い。多くの卒業生は現在の日本が置かれている状況を途上国以上に危機的であると判断しているからであろう。

研修指導に携わった地元の方々も、手紙や電話、インターネットを利用して彼らと連絡を取り、現地で起きている問題を共有している。また、彼らのうち数名は帰国後の就農先として甘楽町を希望し、実際に就農したり農家生産物の流通会社を設立した。このように、単なる一過性の研修ではなく、Uターン・Iターンとして彼らが戻れるシステム作りを進めている。また、研修指導をした地域農家の方々も、彼らのために積極的に農地を探し、技術指導への協力も惜しまない。両者にとって相乗効果があると考えられる。更に、研修が続くことで国際協力経験者がファシリテーターとなり、国内のみならず海外からの研修員受入れのボリュームも増やし、新たな事業拡大にも繋がると考えられる。

この甘楽富岡を人生のステージに選ぶ卒業生も出てきた。「甘楽富岡で農業をやります！」こんな言葉に、研修に関係してくれた方々や行政、農協が本気になって支援してくれている。国内の多くの農村、漁村で過疎化が進む中、この地域には逆に永住しようとする若人がいる。これはまさに、夢をもって農業を考え地域を盛り上げていこうとする甘楽富岡地域の熱い人々がいるからこそ、憧れる若人が出てきたのだと思う。こんな関係作りこそ日本の地域振興や農業振興のきっかけになると確信している。

まさに、国際協力が甘楽富岡地域の文化になるろうとしている。

【 自然塾寺子屋理事長 矢島亮一 】

↓ 詳細はホームページでもご覧いただけます。

自然塾寺子屋 Nature School TERRAKOYA

高崎事務所：〒370-0001 高崎市 中尾町 975
甘楽事務所：〒370-2201 甘楽郡 甘楽町 上野 365
TEL・FAX：0274-74-7369
E-MAIL：main@terrakoya.or.jp
URL：http://terrakoya.or.jp